

# パネルディスカッション問題提起

(日蓮宗現代宗教研究所嘱託)

影山教俊

これから第二分科会のほうから、この「布教教化を機能させるには」と題して、問題提起をさせていただきます。しかし、今日ここで私がお話することは、場合によって非常に聞きづらい話になるかもしれませんが、もし、その聞きづらい場面になりましたら、お話を割り引いて聞いて頂きたいと思えます。

○「世間の目線にたった布教」ということについて

まず、この「布教教化を機能させる」という言い回しについてですが、今までならば、布教教化について議論する場合、その布教教化の意味するところについて考えれば、それで済んでしまったように思うのです。しかし、私は、それだけではどうも布教教化ということを考えるには、何か違うように思うのです。

それだけでは何か、日蓮聖人の教えを知っているとか、また教えを理解しているというような、いつも知識的なことだけが優先されている感じがするのです。たしかに教えを理解することは大切なことなのですが、しかし、宗教的な教えを理解したからといって、その人が、その教えを「おこない」として、実践できることは意味が違ふと思うのです。その辺のことがいつも問われなまま、この布教教化のことが議論されているので、あえて「布教教化を機能させる」という言い方をしているのです。

また、この「布教教化を機能させる」ことで、もう一つ大事なことがあります。それは何かといえば、「世間の目線に立つ」ということです。これについては『現代宗教研究』第三十八号に小論を発表しましたので、これを参考にさせていただければと思います。要点をかいつまんでお話しすれば、「私たち僧侶が持っている自己像と、世間一般がどのように私たちを見ているか、ということに目が向かないと、布教教化はできない」ということなのです。つまり、布教教化は人と人の間で成り立つものですから、当然、それは人間関係そのものはずです。しかし、私たちはいま、この当たり前になかなか気づけないのです。

例えば、今朝の新聞記事に、日本歯科医師連盟という団体から、橋本元首相に政治献金として一億円が渡されたが、その一億円がきちんと報告されていなかった。この一億円の問題で、橋本元首相が警視庁で事情聴取を受けた、ということが載っていました。

その場合は会食会ということで、野中広務元幹事長と、青木幹雄参議院会長さんが同席していて、そこで一億円の小切手が渡され、それを橋本さんが背広のポケットに入れて持ち帰ったというのです。ご本人としては、「私はそこに行ってもいなければ、そんなものは見ていない」と言うわけです。法律的には単に政治献金の報告漏れということ、刑法罰で裁かれるものではないから、それなりの発言をしているでしょうが、私たちから見れば「しつかりと一億円預かったでしょ」という思いがあります。

ここまで事細かに話が流れているのに、そこで橋本さんがそう言つてのけられるのは、そこにそういう政治家の自己像があるのです。政治家として大物の私だから、そういう風に言つてのけても、周囲の人たちはそれを当然のように認めてくれるだろうと、そんな政治家的な目の高さがあつて、それでよしとできると思っているのです。このような政治家と私たちの人間関係は、一方通行になっていますから、これは破綻した関係です。

これと同じように、私たちが僧侶として布教教化するときに、まず世間が私たちをどのように見ているかというこ

とについて、きちんと認識を深めておかなければならないと思います。「世間の目線に立つということ」は、まさにこのようなことなのです。ややもすると、世間の目線に立つということをも、「私たち僧侶が世間の生き方に迎合し、世間のレベルに合わす」というように、何かこう世間的な悪しきものに自分のレベルを合わすというように、自分の教えを低くして、自分を世間のレベルに合わすというようなニュアンスで受け取る方がいます。じつはその意味するところは、「世間一般が宗教に何を求め、何を期待しているか」ということについて、認識を深めなければならぬといっているのです。さきの政治家と私たちの破綻した関係のように、私たち僧侶と世間一般との人間関係が破綻しているのは、布教教化はできないのです。

○「布教教化を機能させる」には自己像に気づかねばならない

たとえば、昨年の施政方針の四本柱の一つ「葬儀に関わる全てのことについての規範」がいろいろ検討されていますが、これは何を意味するかといえば、いま先輩諸師の目線から眺めますと、どうやら近ごろの若い僧侶は、「葬儀法要も満足に出来ない」ように見えている、ということなのです。

そして、この現状を打開するために、まず葬儀法要の技術論的なマニュアルの必要性が力説され、「引導文のあり方」「通夜説教の理念と実践例」などによって、読経・引導・回向も含めた葬儀全体が通夜説教の内容に反映されるべきである、ことなどが披露されています。

しかし、これをわたくし流に言えば、それは世間の目線ではなく、「僧侶の目線にたった布教教化」に対する考え方であって、さきほどの誤解のように、「私たち僧侶が世間の生き方に迎合し、世間のレベルに合わす」、つまり、葬儀法要を世間のレベルに合わせているように見えるのです。こう指摘すると、なんだ！と反発する気持ちになる方もあるでしょう。しかし、私にはそのように見えるのです。

では、この「葬儀に関わる全てのことについての規範」について討議されなければならない現実を、「世間の目線」にたつて眺めますと、何が見えるかと言えば、それは私たち僧侶や寺院の活動が、「世間の人たちにとって、すでに有難く映っていない」ということなのです。

ようするに、葬儀法要に対する技量が向上すればと思うこと自体が、すでに「僧侶の目線」そのものであり、「世間の目線」からすれば、僧侶や寺院の活動が「すでに有難くない」のだから、その打開策は「僧侶や寺院の活動が有難くなる」ことを模索すればよいのです。

まずここで、なぜ「僧侶や寺院の活動が有難くなくなった」のか考えたいと思います。世間一般からすれば、お葬式やご法事を執り行うことについて、それは大仰に何かの宗教を信じているのではないが、世間なりは僧侶にきてもらって、葬送儀礼だけはやってもらいたいけれども、べつにそれ以上のことは求めてないわけです。

つまり、いま私たちの回りのお檀家さんが求めてくるのは、先祖をまつるという「家の宗教」の部分です。しかし、現代はこの家族社会が崩壊して、大家族から核家族化が進んでいますから、個人の家庭が増えています。すると、地域社会もバラバラで、さらに家族社会が小さいですから、すべての責任を個人としての自分が背負うことになります。

この個人としての自分が背負う責任は、とても重いものですから、そこで人々は自分自身の生き方なり、人生の意味なりを支えてくれる宗教的な情操を求めるようになる。そのような場面では、どうも先祖をまつる「家の宗教」は、それはもともと自分が求め選んだものではないから、あまり有り難く感じられないようになります。すると私たち僧侶も、同じように有り難くなくなってしまうのです。

さきに「僧侶や寺院の活動が有難くなる」ことを模索すればいい、といったのはこのためなのです。打開策は、私たち僧侶が有り難く感じられるような状況を作っていけばいいということになるわけです。つまり、さきほどの政治

家の話ではありませんが、寺院という環境の中で、私たちの僧侶としての立ち居振る舞いが、またその姿が、世間一般にどのように映っているかが問題なのです。つまり、「布教教化を機能させる」には、世間がどう私たち僧侶を見ているか、まず自分自身の自己像に気づくことが先決なのです。私たち僧侶と世間一般の方々との人間関係は、破綻してないでしょうか。

くり返しますが、寺院という環境の中で、僧侶に耳障りの良いことを言う人は誰でしょうか。総代さん、世話人さん、あるいは経済的に豊かな檀家さんでしょうか。いずれにしても、ごく少数のお檀家さんでしょう。さきのような、布教教化とは人間関係そのものですから、「アンデルセンの童話の『裸の王様』のように、私たちは「裸の僧侶」であっては困るのです。世間にどう見られているかの自覚が、「布教教化を機能させる」のです。

ここで「世間の目線」で、私たちの姿を厳しく問えば、「社会的には葬儀法要のニーズ以外に求められていない」ということになります。皆さんはこの自己像を率直に認められますか。このようにいいますと、そんなことはないお檀家さんは、私の法話を熱心に聞いてくれていて、と反駁したい方もあると思います。たしかにそれはその通りなのですが、それはあくまで葬儀法要のニーズということであって、世間一般のニーズという意味では、「私たちの布教教化は機能していない」という事実を認めざるを得ないはずなのです。

少し具体的にお話しすれば、私たちは葬儀法要の場面では、通夜説教などを布教教化と思い、お釈迦さまや日蓮さまの教えを口にしますが、世間は亡くなられた方のお弔いのためにそこに参列しているのであって、教えを聴聞するために集まったのではないのです。たんに、「葬儀法要のセット」としてその場にいるだけです。どうして法話だけトッピングして聞いてくれないのでしょうか。この辺りを前置きにして、もう少し問題を煮詰めてみたいと思います。

○新宗教が流行るのはなぜだろう

ここで私たちの「布教教化が機能しない」その理由を探るために、まず新宗教が流行っている実状についてお話しますと、オウム真理教の場合は、ご存じのように毒ガス・サリンによつて殺人テロを起こしたために、宗教法人を解散させられ、麻原教祖は殺人罪で起訴されています。しかし、その後「アーレフ」と改名して、解散後一〇年を待たずして出家信者は一〇〇〇人を回復し、その資産は五〇億円とも六〇億円ともいわれています。

また近ごろ日蓮宗寺院へと折伏に來たり、『諫曉書』なるものを配布している顕正会は、立教開宗七五〇年に会員一〇〇万人達成を目指し、実際に一〇〇万人達成のセレモニーを大々的に打ち上げました。実質その会員数は八五万人程度ですが、収益事業ではなんと年商六五億円を計上しています。それは『諫曉書』の売り上げ、恐らく、皆さんの寺院にも配られたと思うのですが、あれを信者さんが自腹を切つて買い、それを布教のために配っています。

創価学会に至つては、会員総数は公称八二一萬世帯といいますが、実際には三五〇萬世帯程度といいますが、とにかくそれだけの世帯数をかかえています。せんだつての参議院選挙でも、創価学会ペースで公明党自体は八六二萬票集めているわけです。そして、宗教法人の公益事業では、会員会費で年間四千億円、教団としての総資産は十兆円以上だといえます。また収益事業でいけば年間一八一億で、イトーヨーカドーとかKDDと肩を並べる大会社なのです。

ここで私が、アーレフや、顕正会や、創価学会などの状況をお話しているのは、これらの教団を素晴らしいと褒め称えているのではなく、これらの教団が、葬儀法要のニーズによつて運営されているのではない、という事実について気づいていただきたいからです。つまり、葬儀法要のニーズではないところで、その組織を維持しているということは、世間の目線に適應している、世間の宗教的なニーズに應えているということなのです。

お寺というのは、じつはお檀家さんという名の会員制で運営されており、葬儀法要のニーズに應えるために組織さ

れたものなのです。ですから、その成り立ちが根本的に違っているのです。新宗教が葬儀法要の施収入なくしても、その教団組織が運営できるということは、世間一般の宗教的なニーズに对应しているということです。

では、この世間一般の宗教的なニーズとは何かといえば、これはもう言い古されておりますが、人生航路の中で誰もが避けて通れない「病・貧・争の現実苦」です。近ごろの新々宗教へと入信する若者の入信動機は、「若者のむなしさ」だといいますが、いずれにしても現実の苦しみが入信の背景にあるわけです。さきに「家族社会が小さいですから、すべてを自分が背負うことになり、そこで自分自身の生き方なり、人生の意味なりを宗教的な情操として求めるようになる」と言ったのはこのことで、それが入信の動機になっているのです。つまり、新宗教教団が世間一般の宗教的なニーズに耳を傾けているから、そこに有り難さを感じて、多くの人が入信しているのです。

○なぜ僧侶が有り難くなくなったのか

このような意味合いで、さきほどの「近ごろの僧侶は葬儀法要も満足にできない」ということを裏返しますと、「病・貧・争の現実苦」に对应されないから、「葬儀法要も満足に出来ない」と言いかえられるのです。その理由は何かといえば、世間の目線では「僧侶も私たちと同じで有り難くない」、お坊さんも私たちと同じ普通人の感覚で、そう感じてしまうのです。

葬儀法要の場面は、死者を弔う非日常性の場面ですが、現代の僧侶は世間の人とまったく同じような着衣喫飯の日常性を送っていますから、死者を弔う非日常性の場面では、たとえ袈裟衣を着けていても、「世間の目線」からは「所詮、僧侶も私たちと同じ」という日常性の匂いによつて、有り難いという感覚がなくなっているのです。

つまり、死者を弔う非日常性の場面では、ごく当たり前な日常的な生活を営んでいる世間一般の方々は、非日常の葬儀を執り行う僧侶には、「さすがに僧侶は、私たちとはひと味違う」という非日常性を期待しているのです。

また、世間の宗教的なニーズである「病・貧・争の現実苦」も、非日常性によってケアされるのです。ですから、さきの「私たちと同じで有難くない」から「葬儀法要も満足に出来ない」と同じように、有難くないと感じている僧侶には、「病・貧・争の現実苦」もケアできないということになるのです。たとえば、皆さんも、自分と同じ匂いのヒトに、自分の辛い悩みごとについて相談しようと思いませんか。このように世間の目線にたつと、「世間が僧侶には非日常性を求めている」ことが見えてくるのです。

さて、ここで僧侶が日常性に吞まれて、有り難く感じられなくなってしまった理由を、とくに日蓮宗を戦後六〇年史から眺めますと、「昭和二十二年には農地解放による寺領の喪失」「昭和二十六年の新宗教法人法の制定による本末関係の解体」「包括法人日蓮宗による宗制に基づく宗門運営」という大きな変化のあったことに気づきます。

この大きな変化によって、私たち僧侶の本来のイメージ「さすがに僧侶は、私たちとはひと味違う」という非日常性が奪われてしまい、さきのように、世間の目線では「僧侶も私たちと同じで有り難くない」、お坊さんも私たちと同じ普通人の感覚で、そう感じてしまうようになったのです。

つまり、本末関係の解体によって「本山の檀林などで修行し、末寺から成り上がる」という修養システムが崩壊してしまったことや、寺領の喪失などによって檀信徒の顧客化が進んだことなどによって、それまで僧侶や寺院の権威性を支えていた故事来歴から、多くのお檀家さんの葬儀法要のニーズに応える経済的な優等寺院へと移行したのです。

こうなると寺院を継承するあり方も、以前は「この寺院は本山からお預かりしていた」という形態から、住職の師父から弟子として寺院を継承する形態へと変化したので、必然的に僧侶といっても職業的な階級意識が身につけてしまい、僧侶は寺院継承者、司祭階級者の集団と見なされるようになってしまったのです。

この寺院社会では、出家に対する感覚が「住職になるために出家する」という言葉が物語るように、現代では非日



常の宗教体験を持たなくとも僧侶になれてしまうのです。このように、現代の僧侶の自己像を眺めると、宗教を意味論的な志向から理解するために、僧侶の基本的な立ち居振る舞いについての講釈が中心課題になり、何についてもマニュアル対応型であり、そのため宗教の機能論的な志向が欠落し、宗教の知識的な伝達にこだわるようになったのは、当然の流れのように思います。

ここまでで説明や理由づけをやめて、このような状況をどうすればよいか、「世間の目線にたった布教」から問いなおしてみたい。このポイントは、「僧侶としての非日常性の宗教体験」にあると思います。そして、この問いかけは、いま「私たちは葬儀法要以外に何が出来るか」というところから始まるのです。

以上が今回パネルディスカッションを通じて、皆さんと一緒に考えてゆきたい問題の所在です。このところをいま少し深めませんと、布教教化は機能しないと思います。よろしくお願い致します。